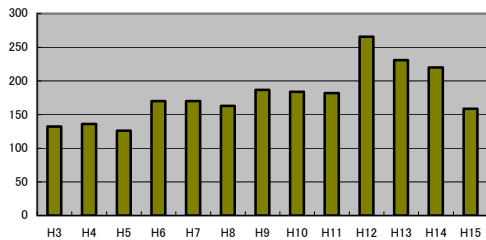


## 「岩牡蠣」 鳥取の夏の味覚を護れ！

鳥取の水産物の中で、夏の味覚としてすっかり定着したのがイワガキです。これまでは旅館や料理店向けの高級商品でしたが、最近では値段が手ごろなものが市場に並び、一般の消費者にもなじみが出てきたのではないのでしょうか。これに伴ってイワガキの漁獲量も増加してきましたが、平成12年をピークにここ数年減少傾向にあります。

鳥取県のイワガキ漁獲量の推移



地区によっては「もう獲るものが無い。」といった声も聞かれ、定められた量を獲るにも以前より時間がかかるということです。また漁獲されたイワガキも以前より小型になってきており、このことからイワガキ資源の悪化が伺えます。

資源状態が悪化した原因の一つに漁場の消失が上げられます。これまで漁獲量が伸びてきたのは、天然の漁場から採捕されたものに加え、公共事業などで投入された消波ブロックや離岸堤などの人工構造物に着生したイワガキが漁獲対象サイズになったことでした。これらは、このところの需要の伸びに乗って次々漁獲され、近年は水揚げされたうちの80%以上を占めるまでになりましたが、イワガキは幼生が着生してから商品になるまで4、5年かかることや、新たに投入される人工構造物が減ったことから、資源的に急速に小さくなりつつあります。また、これら人工構造物では一度漁獲するとその後新たなイワガキが付着せず、漁場としてくり返し利用できないことが分かってきました。

このことを仮説も含めて説明すると、本来、天然漁場のイワガキは、岩礁の砂地に近い部分に付着していることが多く、このような場所は常に砂に洗われたり、時には埋没するといった過酷な環境にあります。このことで岩礁の表面は綺麗な状態に保たれ、イワガキの幼生が着生し易く、また他の生物が生息しにくい為にイワガキが優先的に面を利用できるといったことが考えられます。また一度採捕しても、砂の作用で再びイワガキが利用しやすい環境が再現されるため、よほど岩礁が長期間砂に埋没しない限り、繰り返し再生産が行われ、イワガキ資源が安定的に保たれるということになります。

一方人工構造物では、設置された時期がイワガキ幼生の着生時期と重なった場合、優先的に人工構造物の面を利用できるため、その表面で稚貝が成長してイワガキの漁場が形成されます。しかし、数年が経過してイワガキが漁獲サイズになる頃には、人工構造物周辺はフジツボなど様々な生物が生息するようになり、イワガキを漁獲した後の地肌が露出した面は、早々と他生物の生産活動の場になります。一度他の生物が生息すると、イワガキの幼生が飛来してきても着生できなかったり、先住の生物に捕食されたりして生き残りが少なくなってしまうと考えられます。

そこで、平成13年から栽培漁業センターではイワガキの幼生が着生できるように、人工構造物の表面の付着物を除去する試験を夏泊地区で行ってきました。その結果、9月中旬

から10月中旬にかけて人工構造物の表面をきれいに清掃してやることで、大量のイワガキ幼生が着生、稚貝として成長



することが確認されました。これを受け、昨年度から網代地区と夏泊地区では事業レベルでの取組みが開始され、今年の春からは(財)栽培漁業協会が追跡調査などを受け持ち、稚貝の生残や成長の状況を把握しています。これまで両地区とも量的な稚貝の付着と良好な成長が確認されていますが、場所によっては肉食性巻貝に食害されたり成長に差が生じるなど、解決しなければならぬいくつかの問題も分かってきました。

清掃する人工構造物の選定については生残や成長の面に加え、清掃作業のしやすい対象を選んで面積を確保するといったことも重要なので、効率良い事業展開をするためにはこれまでに得られた情報を基に、より良いマニュアルを作っていく必要もあります。



網代地区と夏泊地区のイワガキ稚貝は来年春には5～6cm程度に成長し、おおよその資源量が推定できますが、漁獲するにはあと数年は

かかります。将来的にイワガキ資源の再生が必要な地区は2地区以外にも出てくると思われ、対策が急がれます。是非検討してみたいと考えられる地区はご説明に出向きますので(財)栽培漁業協会・栽培漁業センターまでご連絡下さい。